

# 私の終戦

小倉 健男 陸士61

昭和19年11月1日、抜けるような秋

空の下、振武台（現陸自朝霞駐屯地）において、陸軍予科士官学校第61期甲生徒（陸軍航空士官学校へ進級の予定）約1500名の入校式が行われていた。

そのとき突然空襲警報が鳴り、殆ど爆音が聞こえない高高度で1機の飛行機が4条の白雲を引きながら、西から東へ飛んだ。この時、すでに8月にサイパン島の守備隊が玉砕しており、何かこのことがある、と覚悟していたので驚きはしなかったが、いよいよ身近に敵が現れたかと、緊張したことを覚えていた。

この時から昭和19年の冬にかけて、度々敵B29の夜間侵入があり、我々は勿論、東京都民が空襲警報のために精神的、肉体的消耗を強いられる作戦に出てきたと思われた。そしてついに昭和20年3月9日深夜から10日（陸軍記念日）払暁にかけて、B29の大編隊が低空で東京上空に侵入し、焼夷弾の雨を降らせた。

警報にたたき起こされ、生徒舎の窓越しに東方を見た時、今までに見たこ

ともない光景があった。猛烈に大きな火炎が立ち上がり、火煙がうすまいて、殆ど振武台のすぐ東の板橋地区がやられたと思つた。実際は違つた。東京中心部から隅田川の東側、江東地区を中心にやられたのである。約10万人が死んだ。

サーチライトに捕捉されたB29を狙つた機関砲の曳光弾のスピードが遅いことに、無念の思いを強くした。翌々日、実家を持つ生徒の外出が許されているが、「焼死体がゴロゴロあつて悲惨な状況である」という話は、すぐに禁止された。江東区浜町にあった糧秣廠がやられたとのことで、数日間、乾パンによる非常食が続いたことのみが、直接の影響であつた。

3月17日、硫黄島の守備隊が玉砕しており、いよいよ守りの体制が終末に近づいているわけだが、我々には特に動揺はなかつた。

4月7日、日中初めて中高度のB29編隊の侵入があり、振武台の上空を南から北へ飛んだ。なめられたものだが振武台の中心部に、行きがけの駄賃のように数発の爆弾を投下した。圧死者が出た。直後指令があり、集合防空壕内では、銃は掩がいを支える支柱として使え、鉄帽は顔面の前空間を確保するために使用せよと徹底された。

61期甲生徒の疎開実行計画は、急速

に進んだ。4月23日に大規模な編成替えがあり、甲生徒だけで中隊を編成し、5月18日夜、朝霞出発、19日早朝、八高線東飯能駅到着の予定で、夜行軍が行われた。私の新たに所属する21中隊（必勝隊）は、寄居町東方約4kmにある花園村、花園小学校が野営地である。

21中隊は、旧23・1/2（一区隊）1・1/2（二区隊）21・1/2（三区隊）2・1/2（四区隊）で構成されていた。

私は第1区隊に所属していたが、区隊長は上床次男大尉（54期）である。上床区助には、多くの編成替えや区助交替があつた中で入校時から最後まで変わらずに心身の訓育に当たつていただいた。これは陸予士在校中の最も幸せなことであつた。

花園小学校での起居、訓練がはじまつたのだが、振武台とは大きな違いがあつた。一つは夜間の空襲警報が全くと言っていいほど鳴らなかつたことである。事実5月24日夜、渋谷を中心に山の手に空襲があつたとき、私は白河夜船であつた。二つ目には、村の中心部にある小学校は、立派な塀があるでもなく開放的であつて、我々の起居訓練等は、全て小学生や村民が知ることであつた。学校のすぐ隣にお寺があり、東京下町の小学生が集団疎開で勉強をしていた。夕刻の一時、我々と子

供たちが一緒に歌を唱へることもあつた。まさに私たちの弟妹も頑張つていて、いう思いであつた。

6月23日、沖繩の守備隊が全滅した。アメリカ軍は制海権、制空権をほぼ全面的に手中に収め、我が国の国土を蹂躪した。国際法上認められない行為で、彼らは積極的に非戦闘員を標的にした。グラマン戦闘機が、単独であるいは編隊で内陸部まで侵入し、機銃掃射をしてきた。

特に、都会に住む人達は、たとえ命が助かつて、家や家財道具のほとんどを全てを無くした。花園村は、その埒外におかれていたように見えたと、遂にグラマンの機銃掃射を受けた。超低空で学校の上空を旋回した敵機は行きがけの駄賃のように機銃を撃つてきた。そのうちの1発が同期の小池三郎の首に当たつた。無念なことである。

本土へアメリカ軍が上陸し、決戦を行うことがこの戦争の結末であろうと感じられ、関東地方では相模湾か九十九里浜であるとされた。我々の日頃の訓練にほとんど変化はなかつたが、その時の区隊内の分担当が明らかになつた。私のようなチビが属する第4分隊は、擲弾筒分隊となつた。しかも私は弾薬箱を背負うのが任務で、銃を持つことができない。区助に嘆願したが、それが任務であると言われた。

花園小学校の南約1kmに荒川本流が流れており、陽気もよかつたので、我々の分隊はここで汗を流した。河原に夫々たこつば防空壕を掘っていた。

私はその頃、いよいよ死ぬことになると考えはじめていた。それは大したことではなかつた。陸予士入校時から父母、姉弟との縁はたち切っていたし、若い男のほとんどは、そのような立場になつていたと思われた。どうすれば死ねるかと思えたが、結局区助の指示の通り動けば結果は出ると納得させた。

8月6日、広島市に特殊爆弾が投下され（のちに原子爆弾とわかる）、大量の死傷者がでた。放射能の前に、まづ爆発時の光線をさける、そのため、たこつばを深く掘れという指示に従つて作業を行った。

8月15日正午、ラジオから玉音放送が流れた。戦うのみと心に決めていた私達は、一瞬何が起きたか理解できず直後のことの記憶を思い出すことが出来ない。この時、中隊長の石坂少佐は陸士62期の採用試験委員として、朝鮮に出張しており、第1区隊長の上床大尉が先任区隊長として、我が21中隊を指揮する立場になつていた。

上床区助は、その瞬間どのように思つたのであろうか。時を経ずして、我が中隊は「承詔必謹」である。軽率妄動は許さない。しかし学校本部からは具

体的な指令が来ていない現在、各人は如何なる事態にも対応できるように準備しておくようにとの命令が出た。

程なく、寄居演習隊各中隊に、寄居小学校への集合命令が来た。我が必勝隊はいつでも戦えるように、銃を担ぎ装備を嚴重にして、寄居の街中を軍歌を歌いながら行進した。とある町角で先生に連れられた小学生20名ほどが、我々を見つめて一斉に旗を振つて「兵隊さん万歳万歳」と声を上げた。その時私はこれから敗けに行くのだと思つて無念の涙があふれ出ることを止めることが出来なかつた。集まつた中隊の中には、すでに武装解除して丸腰の連中もいたから、これは上床区助のささやかな恩情であつたと、後で思つた。

ある夜、10数名の仲間が区助のところへ集まつた。区助は云つた。「日本の国家はどうなるかわからない。しかし世界史の中で民族が消滅したことはない。貴様等は若い。従つて機会を見つけて、もう一度勉強しなおして、日本民族復活のために頑張れ」「区助はどうされるのですか」との問いに、「俺は出来得れば無人島のような所で、しばらく暮らしてみたい」

中隊は花園小学校で解散した。降伏したドイツでは、陸士、海兵の生徒がひどい目に会つたという情報があるの、暫くはひっそりと暮らして様子を

見よ、との指示があつて、戦友はばらばらに、小前田駅から電車に乗つた。

寄居を経て、東上線で池袋へ、上野へ向かつた。東京の一面の焼け野原には無念の思いを更に深くしたが、電車も列車も順調に運転されていることに驚愕した。都会を離れると、周りの景色は、前と全く同じであつたし、国内が戦場にならなくてよかつたと思つた。東京には帰る家が焼けて無いので、直接家族が疎開していた岩手県に向かつた。下車した山田線大槌駅には、復員してくる兵士を迎える町民で一杯になつていた。

私の姉（18歳）は2年ほど前から、当時国民病と言われた肺結核にかかつており、病は篤かつた。やつと疎開して少し安定していたが、私が帰つた直後、昭和20年11月14日、残念ながら仲の良かった弟の顔を見て息を引き取つた。

その直前「健男ちゃん、勉強して必ず高等学校へ行くのよ。きつとよ」と苦しい息の中から遺言を残した。

上床区助と姉佳子の言葉は別々であるが、それからの私の復活生活の心棒となつた。それから70数年、勿論いろいろなことがあつたし妥協もあつた。世の中が次々に変わつて平和ボケが続いている。第2次大戦から時間が経つて、国際的にも不穏な空気が世界を覆い始めた。しかし日本民族と国家の将来は一層安泰であると信じている。